

J. M. チェハノフスキ 「マリアン・クキェル将軍との会談覚書」

(渡辺克義 訳)

訳者はしがき

本稿は、Jan M. Ciechanowski, Trzecia rozmowa z gen M. Kukielem [w:] Ciechanowski, *Powstanie Warszawskie. Zarys podłoża politycznego i dyplomatycznego*, Pułtusk 2004, s. 544-548 [初出: *Zeszyty Historyczne*, nr 29, 1974, s. 136-141] の翻訳である。

マリアン・クキェル (1885年5月15日生、1973年8月15日没) は第二次世界大戦時、軍人および政治家として、ヴワディスワフ・シコルスキ将軍と緊密な関係を持っていた人物として知られる。1942 - 49年に国防相を務めた彼は、ワルシャワ蜂起直前の在ロンドン・ポーランド亡命政府の動向を直接知る立場にあった。本稿の史料的价值の高さに鑑み、訳出するしだいである。

1971年1月31日、ロンドンにて
(イェジ・クルチツキ出席)

チェハノフスキ (以下、J. M. C. と略記) : 1944年7月2日、25日、28日の閣僚会議はどのように展開されたのか。また、何が決められたのか。

クキェル (以下、M. K. と略記) : 7月25日の会議には遅れて出席した。大統領府で参謀長のコパンスキ将軍と会議に出ており、そこから直接向かったのがであった。大統領府での会議では、[亡命] 政府との関係がとだえた場合に備え、国内に与える権限を拡充してはとの議論になった。というのも、AK司令部が、ワルシャワの南にあるカルチェフ近郊の主要無線局がロシアの一大攻撃を受けた場合、切り離されてしまう事態が懸念されていたからである。当時、この無線局が台無しになってしまう可能性があったのだ。つまり、ロンドンとは連絡がつかないが、情勢がワルシャワで蜂起ないし軍事作戦を起こすべきと判断される場合、国内に作戦開始の決定権を委譲すべきか否かということが問題になっていたのである。大統領は、国内政府代表の理性に委ねるという表現で、同意を示した。大統領は重大責任を負わされていたうえに、ミコワイチクやソスンコフスキとも争うことが頻繁にあったので、安堵したのは明らかであった。しかし、会議では国内に宛てる具体的な命令書はまとまらなかった。この命令書の起草は参謀部が担うことになったのだが、7月27日

あるいは28日に閣僚会議はこれを否認することとなった¹⁾。

私は11時頃に閣僚会議に姿を現した。その場で、大統領臨席の会議の経過について述べた。国内に全権を委譲すれば蜂起になりかねない旨をミコワイチクは強調した。ミコワイチクの発言のあと、収拾がつかない議論となった。その意味するところは、彼の7月26日付の国内宛電報²⁾ で語られている。しかし、私の記憶にあるのは、会議を終えた大半の者は、全権委譲問題はまだ決着しておらず、再び議論されると思っていたようであることだ。全権は3つの指導部——政府代表部、挙国一致評議会、AK総司令官——で負うことになっていた。政府代表ひとりに負わせるということはまったく話に出ていなかった。

7月26日には正式な閣僚会議は開かれておらず、情報を得るためにやってきた数人の閣僚による会議が開かれ、議論されたというにすぎない。ミコワイチクはモスクワ訪問の準備をしていた。7月28日、私は閣僚会議にたいして、国内宛訓令案を提出した³⁾。訓令案を議論している時、内相のバナチクが、全権を国内に委ねることは、既にこの件でワルシャワに打電されているので蛇足だ、と言った。閣僚の間ではこれは驚きであり、騒然となった。送信された電報と7月25日の閣僚会議での決定事項が読み上げられた。後者に署名したいと思う者はいなかった。捏造されたものだと思われたからである。7月26日にミコワイチクとバナチクは打電している。これに

については他の閣僚はあずかり知らぬことであった。この電報にクファピンスキ⁴⁾とセイダ⁵⁾は驚いた。私がこの件でポピェル⁶⁾と話をしたかは記憶がない。コット⁷⁾は中立的態度をとっていたが、驚いた様子であった。私個人は、国内に対し蜂起を促すことになってはいないと確信していた。会談の際、誤解が生じたようだ。ミコワイチクは、政府と連絡がとれない場合に限り、国内に蜂起の開始権限を委ねる決定をしたのだという認識のようだった。ミコワイチクは、閣僚会議が決定を覆さないよう7月26日付電報をまとめたのであった。というのも、7月25日の段階ですでに、国内に権限を委譲する必然性について閣僚会議が承知していたからである。7月26日にミコワイチクが国内に権限を委譲したことで、蜂起の発生が予想される事態となった⁸⁾。蜂起を促す結果となった。ミコワイチクは、蜂起がスターリンとの交渉の切り札になると考えていた。しかし、蜂起勃発の数日で、ワルシャワが切り札とはならないことが明らかとなった。それどころか、スターリンに、すべて（新政府とカーゾン線）を認めるのか、それとも、このまったく不可解な冒険をその運命に委ねるのか、と言わせることになる人質のようなものであった。

ミコワイチクは興奮冷めやらぬままモスクワに向かった。蜂起は始まったのか否かという質問が彼を苦しめた。第IV部は作戦に前向きであった。タタル⁹⁾は運命論者で、いまやなんとしても戦わなければならない、成功しようが、失うものがあるが、という考えだった。蜂起の時、タタルはこう言った。「ワルシャワは倒れる。クラクフ、ウッチなどでも繰り返されるべきだ」。これは彼の生の言葉だ。損失などということを彼は気にも留めていなかった。

7月30日、私はイズメイ将軍¹⁰⁾に、ワルシャワ地区にドイツ軍2個師団ないし3個師団が入った旨の戦況報告¹¹⁾を送った。国内からの最後の知らせは、独ソのワルシャワをめぐる攻防が長引き、長期戦になりそうだと示唆していた。

蜂起は長期化すると思われた、したがって、ワルシャワ地区に空輸を行うだけの時間的余裕があった。私はイズメイにたいし、ポーランドへの空輸の問題を英国軍最高幹部の間で取り上げてくれるように圧力をかけた。イズメイはこれを請合った。7月31日・8月1日の両日、政府は、ワルシャワの軍事状況から近日中に蜂起は起こらないだろうと考え、平静だっ

た。ロンドンで快適な椅子に腰掛け、戦況分析を行い、しかるべき結論を導き出すことは容易だった。しかし、かの地のワルシャワは逆の結論を出したのであった。

J. M. C. : ソスニコフスキは戦闘を支持していたか。

M. K. : ソスニコフスキは、当時の状況では戦闘に反対であったが、それを禁じるような決断を下せなかった。対独戦に反対する人物になりたくなかったからだ。7月7日、ソスニコフスキは、「嵐」の枠内で大都市を制圧することに賛成した。もっとも、後にこれを撤回している。国内で既成事実化されている事態を憂慮していた。しかし、7月25日にポーランド軍に蜂起を促すラジオ放送があると——蜂起の臨界態勢の合図だった——、皆が蜂起が起これと知った。私自身は、このことが何を意味するか掴めなかった。しかし、じき想像がついた。だから、私は、ソスニコフスキがすぐにロンドンに戻ってくるだろうと思った。しかし、彼は戻らなかつた。ロンドンに宛てた電報では、ローマ教皇の謁見やド＝ゴールの訪問などについて記し、イタリアにいることのアリバイ作りをしたのだ¹²⁾。

彼はロンドンにいたくなかつたのだ。「ワルシャワでの戦闘を禁じる。ロシア人との間に事前協議がないままでは、成功の見込みはない」と、短くはつきり語るだけの市民的な勇気が彼にはなかつた。「私は禁じる。蜂起であれ、『嵐』であれ、ワルシャワで実施してはならない」と言うべきだったのだ。ミコワイチクなら、ごねて、膨れっ面をしたかもしれないが、結局は折れたことであろう。

J. M. C. : なにか誤解があつたのでは？ ソスニコフスキは蜂起に反対であり、ブル＝コモロフスキは「私は蜂起はやっていない。ただ「嵐」を首都でやっている」のだと説明しているのだから。

M. K. : ブル＝コモロフスキは、ワルシャワをめぐる戦闘は蜂起ではなく、首都版「嵐」であり、その開始に対して責任を負うのは自分自身であると語り、政府にはワルシャワ蜂起勃発の責任はまったくないとした。ミコワイチクは蜂起を促したが、ワルシャワ戦は蜂起ではない、とブルはいう。ブルは、ワルシャワで「嵐」を遂行するようにとの要請があつたものと思っている。

ワルシャワ蜂起は、政治的・軍事的当局者が一つになることなく実行された。極めて否定的な試みであった。戦闘はこのように行われてはならない。こ

のようなことは行われたためしかなかったはずである。我々がおかれていた状況下で行えるようなものではなかった。ピウスツキは1920年8月に前線に赴き、ヴィトスに国家最高司令官を委ねることを断念した時、ピウスツキはこのことを誰にも言わなかった。ヴィトスはピウスツキから渡された書状を金庫にしまい、誰にも見せなかった¹³⁾。

J. M. C.: ソスニコフスキが蜂起直前にポーランドに派遣されることを望んでいたとか、その計画が進められていたというのは本当か。

M. K.: ソスニコフスキはイタリアに出立する直前に、ポーランドに行き、個人的にAK司令部を統括したい、と私に語った。私は、軍最高司令官が戦闘中の地下から指揮することがあってはだめだと説いた。

J. M. C.: ソスニコフスキは国内行きを本気で言ったのであろうか。あるいは単に、政府にたいする脅しの表現だったのであろうか。

M. K.: ソスニコフスキはいつも真剣だった。政府と反りが合わないので、自分にとって重大で厄介な状態から脱出を図るため、ポーランドに行きたかったのだ。ソスニコフスキはたいへんなインテリで名将だが、1944年には迷走していた。当時、人々は自分らしい行動がとれなかった。ソスニコフスキは、ピウスツキとの関係で挫折した過去を持つ。1926年のクーデタで脇にやられ、シミグウィに締め出されると、もはや彼らしさを失っていた。

シミグウィはソスニコフスキほどの人物ではない。シミグウィは軍で私の指揮官だった。優しく感じの良い大佐だった。画家と詩人を庇護していたが、軍事的には自分自身も連隊も統括できなかった¹⁴⁾。彼が率いる連隊は、画家や詩人のおまけのようなものだった。

もっとも、ピウスツキも病んでいた。1914年以前に尿毒症に罹っていて、1920年には動けないほどであった。1920年の攻撃前、8月12日から病気で意識が朦朧としており、決断を下すのも容易ではなかった。ナルトヴィチの暗殺以降、ピウスツキは軍事的に理路整然と考えることができなくなっていた。

J. M. C.: ソスニコフスキ将軍は軍人というよりはむしろ政治家か？

M. K.: ソスニコフスキは政治家でもあり、軍人でもあった。肩書きから明らかのように、長らく軍務大臣を務めていた¹⁵⁾。外国の政治に多に興味を示

していた。1920年1月、ソスニコフスキは、ポーランド・ボルシェヴィキ戦争はもう終わったと考えていた。ロシア側から出された和平条件が、我々が期待していたものより良かったからである。我が軍は貧弱で、国は荒廃していた。しかし、ピウスツキはウクライナへと向かった。

M. K.: もしシコルスキが生きていたら、1944年の歴史のようになったであろうか。AKが既成事実を楯に政府の名で表に出ることを許したであろうか。

M. K.: シコルスキは国を守ったであろう。国内の当局者にたいしては、表に出ることを認めなかったであろう。もしかしたら、国に戻りたいと思ったかもしれない。しかし、1940年のフランスでの体験からそうはしなかったであろう¹⁶⁾。

J. M. C.: 政府は、蜂起勃発の報をどう受け止めたか。

M. K.: ワルシャワでの蜂起の勃発がロンドンに届いたのは8月2日だった。政治・軍事両方の関係者にとってひどく驚きであった。7月30日以降、ワルシャワをめぐる独ソ戦が長期化しそうとの観測から、近日中にAKが首都決戦は起こさないものと思われていたからである。英国は蜂起の知らせに態度を硬化させた。8月1日の蜂起の発生には一同驚愕させられた。

原注

1. Stanisław Kopański, *Wspomnienia wojenne 1939-1946*, Londyn 1961, s. 319. 1944年7月のAKの無線局の問題については、次も論じている。Z. S. Siemaszko, *Łączność radiowa Sztabu BW w okresie Powstania Warszawskiego*, *Zeszyty Historyczne*, nr 6/1964, s. 64 i dalsze.

2. ミコワイチクの電報は次のとおり。「ポーランド共和国政府閣僚会議において、貴殿から申し出があった時刻に蜂起を発令する権限を委ねることを認める決定が下された。もし可能であるならば、事前に我々に報告されたし。軍よりAK司令部宛ての写し」(1944年7月26日付、首相より政府代表部宛ての電報。L. dz. 2088/tjn/44, I.G. S., P. R. M., L 11.)

3. Jan M. Ciechanowski, *Powstanie Warszawskie*, Londyn 1971, s. 361; Kopański, op. cit., s. 321.

4. ヤン・クファピンスキ — 副首相。

5. マリアン・セイダ — 無任所大臣。

6. カロル・ポピェル — 勤労党党首、法相兼行政再

建相。この問題をめぐるポピェル党首の声明については、Ciechanowski, *op. cit.*, s. 353-354, przyp 2.

7. スタニスワフ・コット — 情報相。

8. Ciechanowski, *op. cit.*, s. 252-253; Kopański, *op. cit.*, s. 320-322. 1944年7月25日の閣僚会議の決定にかんする興味深い記述に、次がある。Adam Pragier, *Czas przeszły dokonany*, Londyn 1966, s. 759-761.

9. スタニスワフ・タタル将軍 — 国内問題担当参謀代理。

10. ヘイスティングズ・イズメイ卿 — [英国] 国防軍参謀長。

11. 国内から送られてきた電報に依拠したこの報告書で、クキエル将軍は、ワルシャワのドイツ軍は「多分」10個師団を有している、そのうち2つは装甲師団であろう、と記している（国防相からヘイスティングズ・イズメイ将軍宛ての覚書 K. C. B., D. S. O., 29 lipca 1944, Instytut Gen. Sikorskiego, A. XII. XII, 3/90.2. 次も参照のこと。Ciechanowski, *op. cit.*, s. 272-273.）。

12. Ciechanowski, *op. cit.*, s. 346 i dalsze.

13. Wincenty Witos, *Moje wspomnienia*, Instytut Literacki, Paryż 1964, tom II, s. 289 i dalsze.

14. この件に関して私は正反対の報告を受けている。とりわけ、スタニスワフ・タタル将軍の報告がそうだった。タタルによれば、シミグウイ＝リツ元帥は戦間期、軍事問題で多分に自己統制できていたという。

15. ソスコンフスキは1919-1920年に軍務副相、1920-1924年に軍務相を務めた。

16. 次を参照のこと。M. Kukiel, *Generał Sikorski*, Londyn 1970, s. 112 i dalsze.